

SF的読み解き  
子どもという風景

## 第二十九回

堀内 守

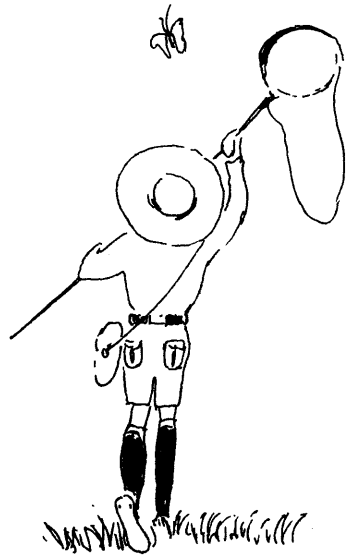
### 気の宇宙へ

「気」のふくらみ

それが存在することはたしかにわかっている。けれども、うまくことばでは表現できない。もどかしい。とはいえ、一步のいてみるならば、この種のことはいくつもあるのに気づく。

「気」などはそのチャンピオン、ともいうべき地位にある。

あらためて考えてみると、「気」は私たちの日常生活のなかではさかんに姿を現わし、「気をつけよ」とか



「元気を出せ」とか、「気になる」とか「気まずい」とか、いろいろな表現とともに登場する。

このように、頻繁に使われていて、便利なことばなのである。

日常使われている便利なことばは、大体においてなめらかで、ひっかかるところがない。逆にいえば類型的なのだ。「はてな？」と思わせるようなことはあまりない。「元気」などはその典型で、「元気がいいね」とか「お元気ですか」などは、「元気」という事実を指すとい

うよりも、相手への心づかいの表明にすり代わっている。

「お元氣そう、ですね」などは、「元氣」という事実に関してはほんの少ししか言及していない。むしろ、相手への「思いやり」「氣づかい」「おせじ」「ヒニク」などの含意の方が事実よりも重要になっている。

日常場面から少し離れてみると、「氣」の現われ方は驚くべき広がりを見せはじめる。

### 「氣」の変幻

そもそもが面白い。「氣」の発生的な場をさぐっていかくと、神話的になる。「氣」は、天地の間を満たすと考えられるモノ、のことであった。謙虚にふりかえってみると、この説明はまことにみごとである。天地の間を、というような壮大なパースペクティヴ（視野）だとか、「満たす」というような具体的であるような、それでいて比喩的でもあるような表現があり、さらに「モノ」という名づけがたいモノを暗示しているからだ。

もっとも、サカシラなふるまいをする人から見ると、こういう説明は古くさくきこえるだろう。しかし、しばらくは、「氣」のも、や、も、やにおつき合いただきたい。

半分サカシラになってみよう。「氣」は「スピリット」である。「精」「靈魂」「精神」という意味のグループがある。また「幽霊」という意味もある。かと思うと、「スピリット」は、そのものズバリに「人」を指す。

「氣分」の意味もある。複数になると、「氣力、元氣、氣概」などになる。「酒精」の意味もある。(アルコールのことですね。)

このように、英語とでも、なかなか一筋縄ではいかない。そこがまた氣になるところ。

古代中国では「二十四氣」というような、氣の遠くなりそうな季節の分類をやっている。立春からはじめて、大寒にいたる分類である。日本の歳時記よりも氣骨がある。

こう考えると、どう見ても、「氣」は、個々人の「氣

分」や「氣力」を超えた一つの形而上学的な觀念といわねばならない。そこで、ふたたび古書をひもといてみる。

いちばん古いものは、「氣」をもって万物の生ずる根元（どうか、コンゲンとおよみください。ネモトではサマになりませんから）と説いている。「天地正大の氣」というような表現もあるくらい。（注、藤田東湖の漢詩です。）

ついで、「氣」は生命力になる。生命の原動力となる勢いのことである。笑ってはいけません。今日でもこの意味の「氣」は、いぜんとして勢いよく使われているから。「氣勢をあげる」などがその典型。

### 「氣」と子ども

さて、「氣」に関してはまだまだ説明は続くのだが、さしあたってはこの辺で小休止をして、「氣」の神話的な意味が子どもとどのように結びつかを見てみよう。

「いずこより来たりしものぞ」と問うてみると、子ども

もの由来はまことに神話的で、詩的ですからある。その生活リズムは夜昼、春夏秋冬、いや二十四氣とともに勢いを変えていく。また、その勢いのさらに根元にある勢いのようなものが、しかるべく見つめているようなところがある。

もちろん、この考え方にも古今東西の差はある。農薬国日本では「葦牙あしの如く萌もえ騰あがる物に因よりて成れる神」と『古事記』がいうように、「小さな芽」に対する呪術的な信仰があった。「素朴」さや「嬰兒みどりご」に帰ることを肯定する老子の道教思想とより合わさって、「子宝」の考え方にもつながっている。

この場合、「氣」は、やわらかく、ふわーと万物を包んでいる。

他方、「氣」は、子どもにおいて、不気味な姿をとって現われることもある。もはや「氣」は、甘い、ふわーとした柔かいものではなく、「氣が遠くなるような」「氣が触れる」ような、「氣を失なう」ような激しさをもってしまふ。コントロールがきかない。子ども自身が自己

コントロールを失わない、まるで「気が触れ」たようにわめき散らし、ころげまわる。

かと思うと、次の瞬間には、そんなことをけろりと忘れて、「気分よく」遊んでいる。

それを見ていると、子どもの心だけの、心理的な説明では解ききれないモノが多いことに気づかざるをえない。「気が短かい」とか、「気が散る」とか、「気詰り」というような「気」の場面は、これはこうだというように一本調子で説明ができない面をもっているというべきだろう。そのことを承知した上で「気」をふたたびたどってみよう。

### 「気」のはたらき

私たちは「○○気」「気△△」というように、いくつもの表現を用いている。そのため「気」そのもののふくらみや広がりについてはほとんど「気にしない」である。「元気を出せ」と相手に呼びかけている人でも、「元気」というときの『気』はどのようなモノなのかなどと

は「気にかけ」ない。

もし、「元気を出せ」という表現をするときに、いちいち「気」の元の意味を「気に」したり、「気をつけ」たり、「気が気でない」ようだったら、それこそ「気がかり」である。時には「気が触れ」ていると見なされるだろう。

だから、大体は、「気」はそんなに「気にかけ」られてはいない。そのかわり、一応の了解が共有されている。すなわち、心のはたらき、心の状態、心の動きを示すときに「気」を使うと。

ただし、この語が用いられる個々の文脈において、心のどの面に焦点をおくかはさまざまである。

少し、それを整理してみると左のようになろう。(それでも大変複雑である。)

第一は「気」をもって「精神」にひきつけて解する場合である。「気がめいる」「気をしずめる」などがこれだ、子どもという観点から見ると、これらは短かい間隔でよく起こっているといえる。しかし、長続きはしない

から「気が楽」である。

第二は、微妙な「気」。これはコトに触れてはたらく心の端々である。「気がきく」「気が多い」「気が散る」などである。しかし、「気が多い」とか「気が散る」が苦もなしに生ずるのに対し、「気がきく」は、「気」がある志向性を鮮明にするとき生ずるといふ違いがある。つまり、「気がきく」は、求心的で、「気が散る」「気が多い」は遠心的といふべきか。

したがって、「気が散る」とか「気が多い」は、えてしてお叱りの対象になるが、「気がきく」はおほめの対象になる。親や教師には思い当たることばかり。

第三は、接続する精神の傾向のこと。「気が短かい」とか「気がいい」など。接続する精神の傾向だから、他者がこれを見抜くことができ、予測することができる。

「あの子は気が短かい」などという。とはいえ、この「接続」は、ずーとそのまま続くわけではない。「気が短かい」ような「傾向」をもっていった子が、実はその「傾向」を修正し、変換していくから「気が楽になる」。「気

がいい」という表現が二重の意味をもっていいことでもその可能性がつかめよう。「気がいい」とは、時によってはほめことば、場合によってはけなすことばになる。

ほめとけなしの双方のあいだから、もの悲しく、ほほ笑ましく、意味が生まれることもある。例「気のいいあひる」という歌ご存知ですね。

第四は、持続する精神の傾向というような持続性ではなく、いま、ここである事をしようとすることを指す。

「どうする気だ?」「気が知れない」などである。「気がない」などもここにはいる。ウォーミング・アップ以前というべきで、この場合は、叱りやおだての対象とはならない。形がさだかでないので、叱ることもできないし、ほめることもできない。むしろ、形がさだかでないのとまどっているわけである。

第五は、関心。心がひきつけられている。「気が進む」「気を入れる」「気がある」。右の第四とくらべてみると面白い。すなわち、第四の場合には「気」がまだ形をととのえていない。それに対し、第五の場合には明ら

かに「気」はある対象へ向かって姿を現わしている。

それを一歩進めると、第六が出てくる。

第六は、形をととのえた「気」が、ある対象のまわりをまわる状態だ。「気をまわす」「気をもむ」「気に病む」など。

第七は、明らかに感情の動きを指している。「気をわるくする」とか「気まずい」などである。

このように整理してみると、子どもはこのうちのどれにもかかわりをもっているが、子どもの「気」は、これらの分類のあいだを忙しくとびまわっているし、まるでこのような分類のあいだを「かくれんぼ」でもするよう「ここと思えばまたあちら」式に動いているといえるほどだ。

### 「気」と場

「気」を考えていくと、結論を一つだけ出して、キレイにまとめる——のは気が進まない。むしろ、変幻のあとや多様なありさまをそのまま認めたいという気にな

る。

ふだんはそれと意識しないのに、あらためて考えると、「気」は、実のところ不定型なものであることがわかっていく。たとえば、その場の「フンイ気」を例にとってみればよい。モノとして示すことはできないが、「フンイ気」は生きていて、私たちを「くつろがせ」てくれたり、「いたたまれなく」させたりする。あとで「気で気を病ん」だり。

はっきりとは見えない。が、その場にただよったり、かもし出されたりするのが「フンイ気」だ。建築学上は同じ教室であっても、二つの教室の「フンイ気」は大いに違う。団地やマンションの場合もそうで、似たようなツクリの各戸は、それぞれ別の「フンイ気」をつくり出している。人が住んでいるからだ。時の重なりのおかげ、場は「フンイ気」をもちはじめ、独自の「フンイ気」をかもし出してくる。

はたらきかけ、かつはたらきかけられる。そういう関係のなかから「フンイ気」は生まれる。

「氣」の組み合わせ

「氣」と結びつく漢字を並べてみると、これまたふしぎな「氣はい」がしてくる。放射型にきれいにまとまるので氣持がいい。

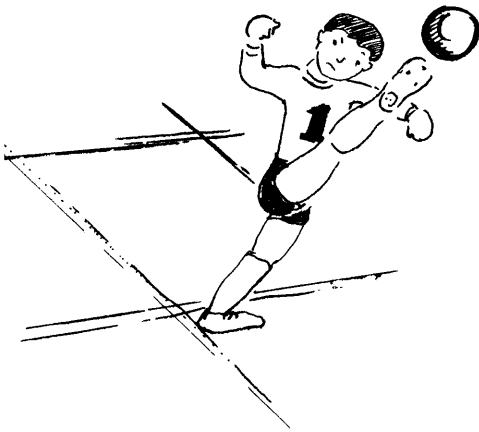
さすが、理科系のことは意味がふくらまない。輪郭をきちんとつけようとしている。気化、気圧、気候、気泡……。これに対し、ほかの「氣○○」は、まことに「氣宇」壮大で、「氣骨」があり、「氣品」があり、「氣

風」がある。かと思えば、「反対に「氣炎」をあげてはいるものの、「氣合」が入らず「氣息」エンエンで、「氣力」の「氣配」もないようなものもある。

他方、「○○氣」の方は「元氣」という頻用度の高いものから「霸氣」「活氣」「心氣」と、やたらに意気まいているものが多い。

動詞を並べてみれば、そこにも形の上で面白いグループ分けが可能である。

第一は「に」のグループである。「氣になる」「氣にす



る」「気にかかる」など。

第二は「を」のグループ。「気をくばる」「気をつける」「気をうしなう」「気をはく」「気をくさらす」等々。

そして第三が「が」のグループ。「気が散る」「気がひける」「気がめいる」等々。

### 気乗り

こういう分類をたどってきて、「気」がある構造をもっているのではないかと気配りをするようになった。気遣うことも多くなる。

当初、気ままに、気を紛らすだけだったようなテーマのごとく見えただけに、いまではだいたいぶ乗り気になって「気」が気にいってきた。

そこでふたたび整理してみる。

私たちは、形のない、ぶよぶよしたものの、どろどろしたものにであうと、不気味に感ずる。その場合の不「気」味さは、ことばではうまく表現できず、わずかに

「何ともいえない」という言語的表現があり、また「言うに言われぬ」とか「異なもの」というような非日常的な表現しかない。

とはいえ、このわずかな表現は、何ともいえないニュアンスをもっている。「何ともいえない」という表現が何ともいえない味をもっている。「うまくいえないが……」と断わりながら、異物、異世界が気になることをみごとに表現しているからである。「うまくいえないが……」と断わりつつ、何とかしてうまくいおうと気を張りつめているのがよくわかる。

気が乗ってくれば、「うまくいえないが……」が何回も挟まれよう。そのあげく、かなり「うまくいえ」ているというような事態も生まれてくる。

気が乗るとは右のような持続がつきつきと生まれてきて、増幅されていくことを指している。

「気乗り」は「フナイ気」と関係がある。「気がない」状態や、「気が散る」状態は、「気」が拡散し、紛れている段階である。その段階から「気になり」「気にする」



段階に進むには何か契機にならない。「気をまわ」している中間段階がある。下手をすると「気まま」のままで終わってしまう。

それを超えるにはまわりの人びとの「気遣い」や「気配り」がモノを言う。「気配」が子どもをつき動かす。こうなると、「気」は、あの神話的な「気」を開き、子どもの「やる気」を触発し、誘発し、持続させ、「気分」や「気色」を喚起し、「気合い」や「気丈」を生み、「気っ風」も生んでいく。

気をつけ！

あの「気をつけ！」という号令は、日常ことばの「気をつけなさい」とつながっているはずであった。多くの国のことばで調べても同じである。にもかかわらず、あの「気をつけ！」という号令には、「気」の多様なあり方を無理に抑え込むところがある。

いかめしくも「不動の姿勢」と呼ばれるこの姿勢は、瞬間的に注意を一点に集中させるといふねらいがある。

持続するリズムを遮断し、みずからを機械のようにピタッと止め、静粛のなかに送り込む。

気の弱い人にはまことに気が重い姿勢である。あまりに緊張が続くと、抑え込まれていた雑念がもぞもぞと頭をもたげてくる。それまで気にならなかった事どもが、一挙に動く気配を示し、不動の姿勢を嘲笑するかのようになる。

「不動の姿勢」は、子どもには無理である。厳肅さが高じると、どうしても笑いたくなるのが子どもである。だれかが、しわぶぎをすると、厳肅さのなかで、つぎつぎとしわぶぎが伝染していき、厳肅さにヒビが入るのもそのためである。

そもそも、日常たえまなく使われている「元気」なることばも「元・気」と分けてみると、少なからぬ混乱や困惑をもたらす。ゲンキのゲンギ（原義）は——とたずねていくと、あるところから先は、もやもやとしてしまふのだ。気力が弱まったとき、ひとは宇宙の気に触れようとしてさまざまな試みをする。叫び、踊り、飛び跳

ね、アルコールをのみ、日常の秩序をつき抜けたところで新しいフンイ気にひたり、「ゲンキ」になって戻ってくる。

この気分の変幻は、移り気なところもあり、やたらに「気分」に応じて、まわりを異なったものとして描き出す。同じ雪でも「楽し気」に浮いているように見えたり、「悲し気」にただよっているように見えたりする。のみならず、「悲し気」な歌を「楽し気」にうたうことだって可能なのである。

### 元気の呪術性

「元気を出せ」という呼びかけは、かけないよりはかけた方がよい。それで状況は変わる——と期待されている。その「元気」は、明治以降、子どもの歌の主流をなしてきた。「元気で体操」「みんな元気で」「元気よくとび起き」「元気で歩く」「元気で運動会」「元気で勉強」「元気で遠足」「元気な子ども」。ホントに「元気」でいっぱいである。

いや、学校ばかりではない。日常人びとがフツの場で、フツーに交わす会話のメモを取ってみると、いちばんよく使われているのが「やあ、お元気ですか」なのである。もって、いかに「元気」が人びとの間柄の調整をしているかがわかる。

やたらに元気過ぎるのも問題である。それは「気で気を病む」というようなことにもつながるし、「気炎をあげ」「氣勢をあげ」ることに気を集中し、気遣いを忘れるからである。

「気」は子どもの風景の大半をおおい、その多様さがかいま見せてくれる。少なからず気になる広がりをもっている。と、気がついて、近代思想の「気取り」の「気」の狭さに「気をもん」で、子どもを見たら古今東西の「気」が全部見られる思い。

(名古屋大学)